

平成9年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

丸 瀉 遺 跡

新 道 遺 跡

馬 越 遺 跡

上 條 館 跡

中 沢 遺 跡

石 川 遺 跡

1998

新潟県加茂市教育委員会

平成9年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

丸 瀉 遺 跡

新 道 遺 跡

馬 越 遺 跡

上 條 館 跡

中 沢 遺 跡

石 川 遺 跡

1998

新潟県加茂市教育委員会

序

近年の新聞報道などでも明らかのように、毎年全国各地で発掘調査が行われ、新たな歴史の発見が続いております。我が加茂市も例外ではなく、様々な開発に伴って、毎年あちらこちらで発掘調査が行われ、これまでにない考古資料が蓄積され、往時の加茂の様子を彷彿とさせる貴重な財産が得られております。

加茂市は新潟県のほぼ中央に位置し、その地勢や風情などから北越の小京都と呼ばれる町であります。遺跡も比較的多く、現在確認されているものだけで約160余りあります。これらの中には、ダム工事や河川改修の際に偶然発見されたものや発掘調査されたものなど様々な遺跡があります。しかし、それらはほんの僅かで、内容がよく分からない遺跡がほとんどであります。

個々の遺跡は私たちの祖先が遙か昔から加茂に居住し、累々と生活を営んできた証でもあります。現代に生きる私たちは、これらの文化遺産を大切に、後世に伝える義務と使命があるのではないのでしょうか。そして、遺跡から先人の暮らしぶりや知恵を偲び、学ぶことがたくさんあるように思います。

加茂市教育委員会では、平成7年度から国・県の補助金の交付を受けて、各種開発と埋蔵文化財の取り扱いの協議資料を得るための事前調査として、加茂市内遺跡発掘調査を実施しております。本年度は、その3年次目にあたり、丸瀉遺跡、新道遺跡、馬越遺跡、上條館跡、中沢遺跡、石川遺跡の6遺跡に対して調査を行いました。本書はこうした事業により得られた情報のささやかな報告書ですが、加茂市の歴史を解明する一助になれば、この上なく幸いなことであります。

最後に、本事業に格別なるご指導を賜った新潟県教育庁文化行政課をはじめ、調査に従事された調査員、作業員各位、ならびに調査にご理解、ご協力いただいた事業者、地権者及び工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成10年9月

加茂市教育委員会
教育長 土佐 弘

例 言

1. 本報告書は、平成9年度に新潟県加茂市内における各種の開発に伴い実施した6遺跡の確認調査の記録である。本事業は、「加茂市内遺跡発掘調査」として、平成7年度から実施しているものである。
2. これらの調査は、丸瀧・新道・馬越遺跡が国道403号線道路改良工事に、上條館跡が林道拡幅工事に、中沢・石川遺跡が民間開発に係わり、遺跡取り扱いの事前協議資料を得るために実施したものである。
3. 確認調査の経費は、国庫及び県費の補助金交付を受けた。なお、中沢・石川遺跡の確認調査に要した経費については、事業者側が負担した。

4. 調査は加茂市教育委員会が主体となり、実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	土 佐 弘
総 括		社会教育課長	田 澤 弘 一
管 理		社会教育課課長補佐	相 田 喜一郎
庶 務		社会教育課主事	塚 野 正 明
調査担当		社会教育課主事	伊 藤 秀 和
調査補助員		日々雇用職員	山 田 昇 (中沢・石川遺跡)
現場作業員	青柳泰二・有本七次・泉田政広・今井慎一・梅田作衛・加藤芳司・加茂良男・萱森茂雄・嶋田キクエ・高橋静三郎・鶴巻英一・樋口ハルノ・福原久栄・馬場欽市 (加茂市シルバー人材センター会員)		
整理作業員	坂上有紀・武田陽子・増井君子・横山敦子		

5. 本調査により出土した遺物や図面・写真などは加茂市教育委員会が一括して保管している。
6. 本報告書の編集・執筆はすべて伊藤が行ったが、遺物写真撮影及び編集の一部については山田昇が行った。
7. 図版1の空中写真は、朝日新聞社発行の、米軍が昭和23年11月に撮影したものを使用した。縮尺は約1/20,000である。
8. 本書で示す方位は真北である。磁北は真北から西偏約7°10'である。
9. 本書に掲載した遺物は各遺跡毎に通し番号を付し、実測図と写真の番号は同一としている。
10. 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の諸氏・機関から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。(敬称省略・五十音順、機関などの名称は調査当時のものである)

青山誠八・安藤正美・石坂圭介・石原正敏・大橋信彦・小田由美子・春口真実・金子拓男・金子正典・北村亮・駒沢悦郎・坂井秀弥・笹沢正史・鈴木俊成・関口 満・関 正平・高橋 保・高橋雅弘・高花宏行・滝沢規朗・田畑 弘・田村浩司・立木宏明・寺崎裕助・鳴海忠夫・本間秀之・渡邊朋和・加茂市シルバー人材センター・加茂市建設課・加茂市農林課・㈱アオイ産業・㈱小柳建設・菊田建設株式会社・新潟県教育庁文化行政課・新潟県埋蔵文化財調査事業団・南蒲原地域史研究会

目次

I	序説	1
1	平成9年度事業の概要	1
2	遺跡の位置と環境	2
II	国道403号線道路改良工事関連	3
1	調査に至る経緯	3
2	丸瀧遺跡第2次調査	3
	(1)発掘調査の概要	3
	(2)層序	4
	(3)遺構と遺物	4
	(4)調査のまとめ	4
3	新道遺跡	5
	(1)発掘調査の概要	5
	(2)層序	5
	(3)遺構と遺物	5
	(4)調査のまとめ	5
4	馬越遺跡第2次調査	6
	(1)発掘調査の概要	6
	(2)層序	6
	(3)遺構と遺物	6
	(4)調査のまとめ	7
III	林道拡幅工事関連	10
1	調査に至る経緯	10
2	上條館跡	10
	(1)発掘調査の概要	10
	(2)層序	11
	(3)遺構と遺物	11
	(4)調査のまとめ	11
IV	民間開発関連	12
1	調査に至る経緯	12
2	中沢遺跡	12
	(1)発掘調査の概要	12
	(2)層序	13
	(3)遺構と遺物	13
	(4)調査のまとめ	17
3	石川遺跡	17
	(1)発掘調査の概要	17
	(2)層序	17
	(3)遺構と遺物	17
	(4)調査のまとめ	17
V	まとめ	19
1	中沢遺跡出土弥生土器と周辺の弥生時代の遺跡について	19
2	馬越遺跡・中沢遺跡出土の平安時代土器について	21
	遺物観察表	22・23
	引用・参考文献	24

挿 図 目 次

第1図	調査対象遺跡位置図 (S = 1/50,000)	2
第2図	丸渦遺跡・新道遺跡確認調査トレンチ設定図と本調査必要区域 (S = 1/3,000)	3
第3図	丸渦遺跡土層柱状図	4
第4図	丸渦遺跡出土遺物	4
第5図	新道遺跡土層柱状図	5
第6図	新道遺跡出土遺物	5
第7図	馬越遺跡確認調査トレンチ設定図と本調査必要区域 (S = 1/3,000)	6
第8図	馬越遺跡土層柱状図	7
第9図	馬越遺跡出土遺物	8
第10図	馬越遺跡出土遺物	9
第11図	上條館跡と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	10
第12図	上條館跡推定範囲と上條館跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1/2,000)	11
第13図	上條館跡周辺採集遺物	11
第14図	上條館跡土層柱状図	11
第15図	中沢遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1/4,000)	13
第16図	中沢遺跡土層柱状図	14
第17図	中沢遺跡出土遺物	15
第18図	中沢遺跡出土遺物	16
第19図	石川遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1/4,000)	18
第20図	石川遺跡土層柱状図	18
第21図	中沢遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布図 (S = 1/100,000)	20

写 真 図 版 目 次

図版 1	平野部の遺跡周辺の空中写真、丸渦遺跡近景 北から、調査風景、13トレンチ土層断面 東から、15トレンチ土層断面 東から
図版 2	16トレンチ土層断面 北から、17トレンチ土層断面 北から、19トレンチ土層断面 北から、20トレンチ土層断面 西から、丸渦遺跡出土遺物、新道遺跡近景 西から、調査風景
図版 3	9トレンチ土層断面 西から、10トレンチ土層断面 西から、11トレンチ土層断面 東から、12トレンチ土層断面 南から、22トレンチ土層断面 南から、23トレンチ土層断面 東から、新道遺跡出土遺物
図版 4	馬越遺跡近景 北から、調査風景、19トレンチ土層断面 西から、20トレンチ土層断面 西から、22トレンチ土層断面 東から、31トレンチ土層断面 西から、32トレンチ土層断面 西から、45トレンチ土層断面 南から
図版 5	馬越遺跡出土遺物
図版 6	馬越遺跡出土遺物
図版 7	上條館跡近景 東から、調査風景、4トレンチ土層断面 北から、6トレンチ土層断面 南から、中沢遺跡近景 南西から、調査風景、調査風景、14トレンチ土層断面 東から
図版 8	15トレンチ土層断面 南から、19トレンチ土層断面 東から、20トレンチ土層断面 西から、28トレンチ土層断面 北東から、30トレンチ土層断面 西から、32トレンチ土層断面 西から、34トレンチ遺物出土状況、34トレンチ土層断面 北から
図版 9	中沢遺跡出土遺物
図版10	中沢遺跡出土遺物
図版11	石川遺跡遠景 西から、石川遺跡近景 北から、調査風景、調査風景、2トレンチ土層断面 東から、5トレンチ土層断面 北から、7トレンチ土層断面 東から、10トレンチ土層断面 東から

表 目 次

第1表	平成9年度発掘調査工程表	1
第2表	遺物観察表	22・23

I 序 説

1. 平成9年度事業の概要（第1表）

本年度は、昨年度から引き続き国道403号線道路改良工事に係る3遺跡、林道改良工事に係る1遺跡、民間開発に係る2遺跡を対象に年度当初から年度末にかけて、事前に遺跡の規模・内容を確認するための市内遺跡確認調査事業を実施した。

国道403号線道路改良工事については、平成8年度に用地買収終了区域のみを対象にした第1次確認調査を行ったが、鬼倉遺跡を除いて本調査必要区域を明確にし得ない状況にあった。本年度は一部用地買収完了区域が存在するものの、本調査必要面積に関連する調査期間とそれが及ぼす道路開通時期や工事計画とのからみもあり、今後の本調査必要区域を明確にする目的で年度当初から実施された。丸瀧遺跡、馬越遺跡を対象にした調査で、丸瀧遺跡とはやや距離を置いた地点で遺物の出土が見られ、新遺跡として新道遺跡を確認した。今年度の調査で国道403号線道路改良工事建設計画画内における埋蔵文化財の所在状況と本発掘調査必要区域などが明確にされた。

林道改良工事は加茂市の事業で、平成9年度に上條館跡地内での工事が計画されていた。市教委では7月下旬から鬼倉遺跡の本調査に取りかかっていたが、結果的に予想を上回る調査期間を必要とし、上條館跡地内の確認調査がいつ行えるかなかなか目処が立たない状況となった。しかし、工事規模が小さく、短期間での調査が可能であったことから、鬼倉遺跡の調査の合間を見て、用地買収終了後の11月上旬に実施した。

その後、11月中旬ごろに中沢遺跡地内における工場建設計画が明らかになり、開発業者から年内の調査終了が要望され、鬼倉遺跡の本調査終了間際から年末にかけて実施した。また、平成10年に入り、石川遺跡地内における宅地造成工事計画が知られ、やはり早期の調査終了が要望され、年度末ぎりぎりを実施する運びとなった。しかし、中沢遺跡・石川遺跡の確認調査に要した経費は、当初市が予定していないものであったため、調査原因となった民間業者に負担して頂いた。埋蔵文化財に対してのご理解、ご協力に厚く御礼申し上げる次第である。

民間開発以外は年度当初から把握し、計画していた事業であったが、年度途中にて確認調査が必要な状況が明らかになる事業については、人的・予算的に対応することが難しい状況にある。当初予定していた園場整備事業に関連した確認調査時期が変更になったため、かろうじて民間開発に対応できたと言える。また、昨年度もそうであったように、調査条件の良い冬期間であっても、積雪や天候不順の合間を見て、調査を実施せざるを得ない状況下にある。

遺跡名・調査次	遺跡の主 な時代	平成9年											平成10年			
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
確認調査																
丸瀧遺跡（第2次）	古墳		—													
新道遺跡	古墳		—													
馬越遺跡（第2次）	平安		—													
上條館跡	中世										—					
中沢遺跡	弥～中世											—				
石川遺跡	古～平安															—
本発掘調査																
鬼倉遺跡	平安															

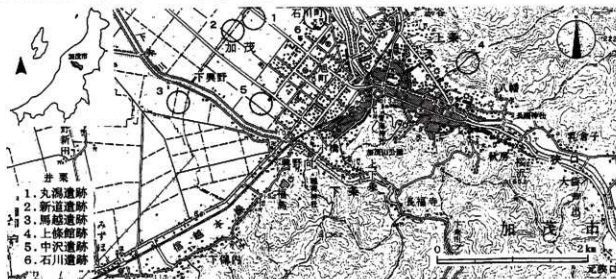
第1表 平成9年度発掘調査工程表

2. 遺跡の位置と環境 (第1図)

加茂市は、新潟市の南方約30km、長岡市の北方約30kmに位置し、新潟県のほぼ中央部にある。市域は東西約17km、南北約8km、面積約133.67km²を測る。東に村松町、西に三条市、南に下田村、北に白根市・田上町と接し、中越地区に属する。加茂市の地勢は東部に粟ヶ岳、権ノ神岳などの1,000m以上の山地がそびえ立ち、粟ヶ岳を源とする加茂川が、市域北西方向に流れ、山地に近接する七谷地区で、その支流である小乙川・高柳川・大谷川・西山川などが僅かではあるが、段丘地形を形成し、谷底平野を抜け、信濃川に注ぐ。中央部には東山丘陵が存在し、市街地が丘陵沿いから沖積低地部へ向けて展開する扇状地形に発達している。該区域は蒲原平野の南部にあたる。

今年度調査対象になった丸瀧遺跡・新道遺跡・馬越遺跡・中沢遺跡・石川遺跡は市街地に近接し、扇状地～沖積低地部に立地する。近年、市役所庁舎移転や国道403号線バイパス建設などに関連し、近接した区域での開発が今後も見込まれ、沖積低地での遺跡調査が予想される。扇状地～沖積低地部においては、古代の遺跡が多数確認されており、ところによりその下層面に古墳時代の遺跡が存在することが示唆されている〔伊藤1997a〕。だが、今回中沢遺跡から出土した弥生土器はさらに古い遺跡の存在を示し、今後も注意していかねばならない状況にある。ちなみに、周辺部で発掘調査された遺跡として千刈遺跡、釜淵遺跡があり、古墳時代前期から後期の良好な資料が検出されている。また、東山丘陵から張り出した緩傾斜地の先端部に立地する陣ヶ峰北遺跡からは、平成8年度に発掘調査され、縄文中～後期の土器が少量に検出されている。同様の地形を呈すると考えられる加茂市役所遺跡からも縄文中～後期の土器が少量ではあるが検出されている〔伊藤1995a〕。また、古代期の遺跡については、近年、沖積地に多く立地していることが明らかにされつつあり、田上町道下遺跡では10世紀初頭の集落〔田畑1994〕が、三条市来迎寺遺跡からは9世紀後半の集落〔金子・田村1997〕が発掘調査されている。

上條館跡は、市街地からほど近く加茂川支流の大皆川によって開析された谷部に立地している。上條館跡周辺部には中世の遺跡が多く確認されており、関連性をもった形で存在するものと考えられる。本遺跡南東丘陵上には上条城、上条城域下に舞臺遺跡、屋敷田遺跡などが知られる。舞臺遺跡は平成8年に発掘調査され中世前期を中心とする集落跡および旧河川跡などが検出された。屋敷田遺跡も確認調査の結果、14世紀代の遺構、遺物が検出されている〔伊藤1996a〕。これらの遺跡が位置する上条地区は、建武3(1336)年11月1日の足利尊氏御教書写「越後国青海庄内上条本村」、文和4(1355)年4月2日の羽黒義成軍忠状「今月2日青海庄賀茂口於陣峰、致散々合戦追落畢」と記され、これらの文書に関連した遺跡である可能性が高い。



第1図 調査対象遺跡位置図 (S=1/50,000)

II 国道403号線道路改良工事関連

1. 調査に至る経緯

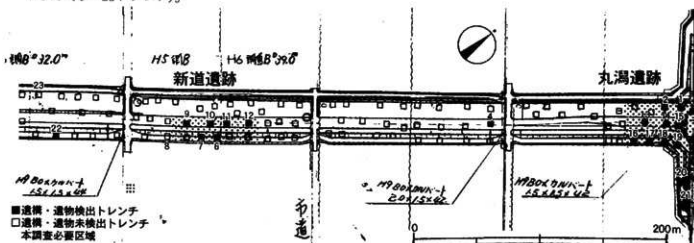
一般国道403号線は北東～南西方向にかけて加茂市内を縦断し、JR信越本線にはほぼ並行して走る重要な幹線道路である。近年、その交通量の増加から渋滞・混雑を起こす状態にあった。新潟県はその解消を計るために、昭和59年度に三条北バイパス（全体延長8.3km）を4車線計画で事業が着手された。加茂地区については、加茂川右岸の盛土工事が昭和63年度から本格的に開始され、平成6年11月には加茂川に架かる千代橋が供用開始された。その後、平成9年3月に村松田上線から加茂市の主要地方道長岡新尾巻線に至るまで暫定2車線で供用開始が成されている。

本事業と埋蔵文化財の取り扱いについては、平成7年末に新潟県教育委員会主催の詳細分布調査が実施されるに及び、法線内に大塚遺跡・丸潟遺跡・鬼倉遺跡・馬越遺跡が存在することが確認された。このことから、三条土木事務所、県教委、市教委、市建設課などで埋蔵文化財の今後の取り扱いについて協議を重ね、延長約1.8km区間について確認調査を実施することになった。平成8年度においては、丸潟遺跡第1次・鬼倉遺跡・馬越遺跡第1次確認調査を実施したが、その段階で用地買収が終了しておらず、遺跡の範囲・内容を知るには不十分なものであった〔伊藤1997a〕。調査終了後、ほぼ全ての用地について買収が終了したことから、丸潟遺跡、馬越遺跡について第2次目の確認調査を4月当初から実施することになった。市教委は平成9年4月14日付け民資第47号、4月22日付け民資第54号で丸潟遺跡、馬越遺跡について文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛に行い、確認調査を開始した。

2. 丸潟遺跡第2次調査

(1) 発掘調査の概要（第2図）

調査は、昨年度調査未了区域でその後用地買収が終了した道路工事予定法線内約13,000㎡を対象に行った。現況はすべて水田で、任意の2m×2mの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。昨年度の調査結果から遺物が出土する深度などを予測しながら進めた。次に述べる新道遺跡が存在する区域も合わせ、約240㎡を調査した。なお、トレンチ番号は平成8年度調査から続け、一連のものとした（9～23トレンチ）。



第2図 丸潟遺跡・新道遺跡確認調査トレンチ設定図と本調査必要区域 (S=1/3,000)

(2) 層序(第3図)

昨年度における第1次調査結果と矛盾するものではないが、13~15トレンチでは明確な遺物包含層が存在しないものの地表下約40~70cmの地山面上から比較的多くの土器が出土する状況であった。また、16~20トレンチでは1、2トレンチ同様に地表下約70~120cmの第VII層とした暗灰黒色土が存在し、遺物包含層が認められた。両者は最大で遺物出土層位に約80cm程の開きがあるが、遺構形成面が二面あるのか、自然地形の起伏に帰因するものかは、出土遺物が僅少であることと時期的に大きな開きがある特徴を看取できないことなどからにわかに判断できない。

(3) 遺構と遺物(第4図)

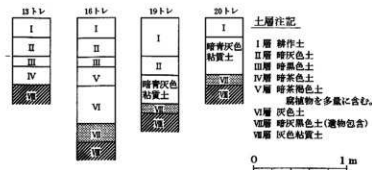
遺構は調査面積の狭さや湧水などで明確には確認できなかった。遺物は、すべて土師器で約80点程検出されている。出土遺物は細片が多く、器形が把握できたものが少ない。また、遺存状態も悪く、図示できたものは以下の8点のみである。

1、2は甕形土器口縁部片である。それぞれ「く」の字状口縁を呈し、1は口縁端部がやや薄くなりながら丸くおさまり、2はやや面をもつ。口径は1が15.6cm、2が19.4cmを測る。また、1は口縁上部に径0.7cmの円孔を施すが、用途は不明である。3、4は甕形土器底部片で、いずれも上げ底を呈する。底径は3が3.0cm、4が1.4cmと小さい。3の外面にはススが付着している。4の外面に僅かではあるがハケメ調整が見られる。5~7は小型鉢形土器で、3点とも形差を持つ。5はやや深めの体部に屈曲した短い口縁部を持つ。口径は15.6cmを測る。外面全面にススが付着する。6は5に比べ深めの体部に屈曲した短い口縁部を持つ。口径は14.0cmで、やや小振りである。7はやや浅い体部に屈曲した短い口縁部を持つ。口縁の屈曲は少ない。口径は14.4cmである。いずれも粗雑なナデ調整であるが、概して器壁は薄い。8は器種不明であるが、底部片と思われる。底径は5.6cmを測る。

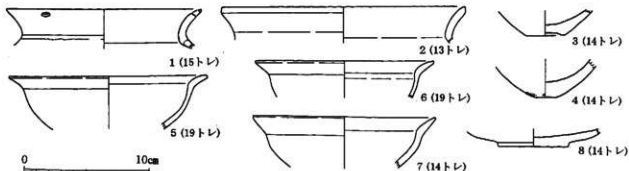
以上、僅少な資料ではあるが、特に5~7の小型鉢形土器は器形や粗い調整などから、古墳時代前期で漆町編年8群〔田嶋1986〕を前後する時期の所産と考えるべきである。

(4) 調査のまとめ

第1次、第2次の確認調査結果から本遺跡は沖積地の微高地上に位置した古墳時代前期の遺跡と考えられる。明確な遺構が確認されておらず、遺跡の性格は不明な点が多いが、遺物を散発的にはあるが出土した1、2、13~21トレンチ周辺部約2,550㎡について本調査を実施する必要があるものと判断される。



第3図 丸瀧遺跡土層柱状図

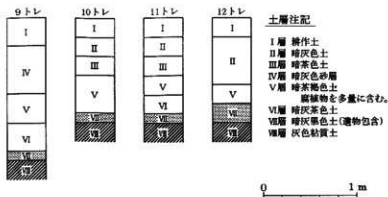


第4図 丸瀧遺跡出土遺物

3. 新道遺跡

(1) 発掘調査の概要 (第2図)

調査は、昨年度用地買収未了であった区域を対象に任意の2m×2mの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。周知の遺跡である丸溝遺跡からやや離れた位置にあり、丸溝遺跡との間に全く遺構・遺物が認められない区域が存在したことから、9～12トレンチ周辺を新道遺跡として認識し、新発見遺跡とした。昨年度の調査から現地地表から1m以上も深いところから遺物が出土することが明らかであったので、深度に留意しながら調査にあたった。



第5図 新道遺跡土層柱状図

(2) 層序 (第5図)

第1次調査の6、7トレンチ周辺部では同じ層序を呈していた。やはり暗黒茶褐色系の腐植物層より下層で、現地地表下約100～140cmのVII層暗灰色土から上器が出土した。VII層暗灰色土は10～20cmの厚さで遺物包含層となる。VIII層暗灰色土が存在しない区域では、腐植物層が厚く堆積し、遺跡が存在しないものと判断される。

(3) 遺構と遺物 (第6図)

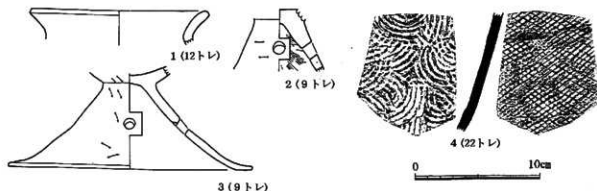
遺構は調査面積の狭さや湧水などで確認は困難であったが、10、11トレンチにて径約20～30cm程のピットが数基見られた。遺物は、約65点程の土師器が出土している。やや大きめの破片も見られるが、大半が小片で図示できたものは以下の3点のみである。なお、4の須恵器は22トレンチ出土で腐植物層から単独で出土した。

1は甕形土器口縁部片である。「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は丸くおさまる。口径は13.8cmを測る。外面にススが付着する。12トレンチ出土資料である。2、3はともに受部に欠損した器台の脚部である。いずれも「ハ」の字に開く形態であるが、3はより大きく開き裾部もやや外反する。脚部径は19.6cmを測る。両者とも外面はミガキ調整が施される。4は須恵器甕の体部片で、外面格子目、内面同心円のタタキが見られる。平安期の所産であろう。

以上、4を除いた資料は器形などから古墳時代前期に位置づけられる。

(4) 調査のまとめ

第1次、第2次の確認調査結果から本遺跡は丸溝遺跡同様に沖積地の微高地上に立地した古墳時代前期の遺跡と考えられる。ピットなどが検出されているが、具体的な遺跡の性格は不明点が多い。遺物、遺構が確認されている9～12トレンチ周辺部約1,500㎡について本調査を実施する必要があるものと判断される。



第6図 新道遺跡出土遺物

4. 馬越遺跡第2次調査

(1) 発掘調査の概要(第7図)

調査は、昨年度用地買収未了であった区域を対象に任意の2m×2mの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。約8,000㎡を対象に53トレンチ、約210㎡を調査した。ほとんどすべてのトレンチから遺構・遺物が検出され、遺跡が広範囲に存在することが明らかになったことから、再度昨年度調査を終了した区域へ調査対象域を拡大し、数カ所トレンチを設定し、道路計画法線内における正確な遺跡の範囲と本調査必要区域の把握を目指した。

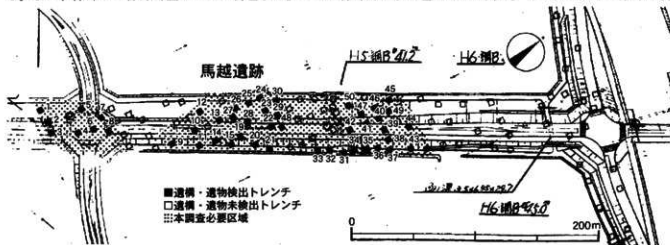
(2) 層序(第8図)

各地点によって土層堆積状況はかなり異なる。まず、大きくは下条川に向かうにつれ地形が落ち込み、低くなるようである。また、法線内のところどころで遺構・遺物の検出が途切れるところがあり(昨年度対象区域では8トレンチと9トレンチの間、本年度対象区域では30トレンチと50トレンチの間)、やはり地形の変化が看取される。19～23トレンチ周辺部においてはほぼ同じ土層堆積状況が看取でき、IV・V層とした黒色系の土層から、遺物が出土する。地表下約40～60cmに存在する。また、概ね48トレンチから下条川に向かうトレンチ各所では、腐植物層の堆積が顕著となるが、この腐植物層の下層にあるVI層とした黒色系の土層が遺物包含層を形成している。地表下約70～120cmに存在し、前者に比べやや深いところにある。

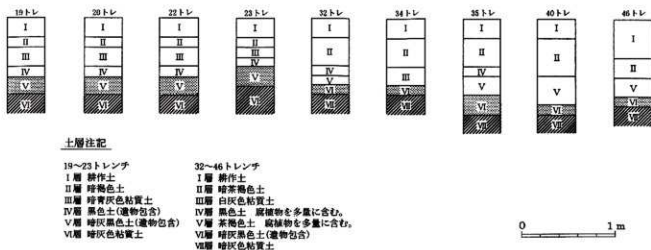
(3) 遺構と遺物(第9、10図)

多くのトレンチから遺構と遺物が検出された。遺構は昨年度の調査区域内では明確でなかったが、19、22、24、26、27、28、31、32、33、37、38、39、40、41、42、45、46、48、50トレンチから溝状遺構を中心にピット、土坑が確認されている。遺構はプランを確認後埋め戻し、発掘はしなかった。かなりの密度で検出されたことから、集落の一部にあたるものと考えられる。遺物の種別毎の出土数は各トレンチ合わせて土師器約270点、黒色土器3点、須恵器約160点、灰軸陶器1点、珠洲焼1点が出土している。須恵器は比較的大きい破片での出土である。灰軸陶器は瓶類かと思われる小片が28トレンチから出土しているが、器種、器形ともに不明で図示できなかった。以下、器種毎に概略を述べるに停める。

土師器の器種は無台碗、皿?、長甕、小甕、鍋が出土している。1～6は無台碗であるが、器形がわかる資料は1しかない。1は比較的大きめの平底の底部から体部が内湾して立ち上がり、口縁部でやや外反する器形を呈する。口径12.2cm、底径5.0cm、器高4.1cmを測り、器高指数34、底径指数41を示す。底部調整は回転糸切りである。また、体部～口縁部外面にススが付着する。2は口縁部片で、口径15.2cmを測る。3～6は底部～体部の資



第7図 馬越遺跡確認調査トレンチ設定図と本調査必要区域 (S=1/3,000)



第8図 馬越遺跡土層柱状図

料である。底部と体部の境が括れ、体部の立ち上がりが比較的急な3、4と緩やかに立ち上がる5、6に分類される。底部調整はすべて回転糸切りである。7は器形は不明であるが、口径18.0cmを測り、皿かと思われる資料である。8～18は甕で、長甕(8～13)と小甕(14～18)に分類される。長甕は長胴、丸底になる形と思われるが、胴下半部の形を窺えるものはない。口縁部はいずれも「く」の字に屈曲し、端部の形により、面をもつもの(8・9)、上方につまみあげられるもの(10・11)、幅広で中央が凹むもの(12・13)に分類される。口径は20.6～26.0cmを測る。14、15は小甕の口縁部で、短く「く」の字に屈曲し、端部が内面上方にひきだされる14、やや長めに「く」の字に屈曲し、端部が内面上方にひきだされる15がある。15の口縁内面には炭化物が付着する。口径はそれぞれ17.8、17.6cmである。16～18は底部片で、いずれも底部調整は回転糸切りである。底径は6.0～6.6cmである。19は口径33.4cmを測る鍋である。口縁端部に面を持つ。

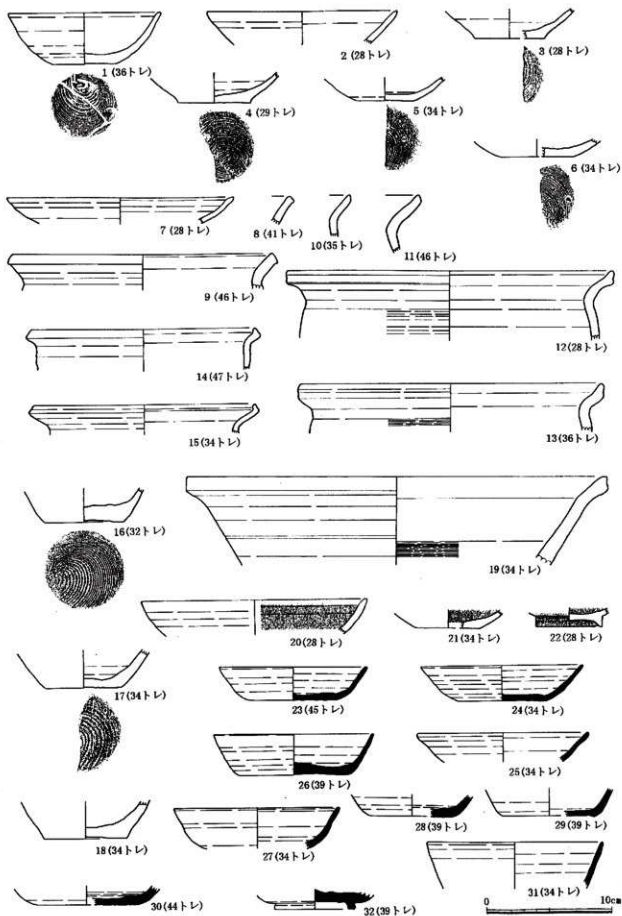
黒色土器には無台碗(20・21)と有台碗(22)がある。22は高台内外面とも黒色処理される。

須臾器の器種は無台杯、有台杯、杯蓋、壺、甕がある。23～30は無台杯である。口縁の外傾度が大きいもの(23～25)と外傾度が小さいもの(26～30)の二つのタイプがある。底部外面はすべてへら切りである。31～33は有台杯である。深身のタイプで、高台は断面方形を呈する。34は杯蓋である。35はあまり類例を見だし得ない器形であるが、皿ないしは高杯の口縁部であろうか。36、37は壺類の底部片である。38～46は甕の口縁および体部片である。38は口径30cm以上と推定される大甕の口縁部である。内外面に自然軸がかかる。39～45は体部片で、外面格子目・内面同心円(39)、外面格子目・内面同心円と平行線(40)、外面平行線・内面同心円(41)、外面格子目・内面平行線(42・43)、外面綾杉文・内面同心円(44)、内外面平行線(45)のタタキと組み合わせの種類が豊富に見られる。46は珠洲焼壺T種体部片で、外面に綾杉状のタタキが見られる。

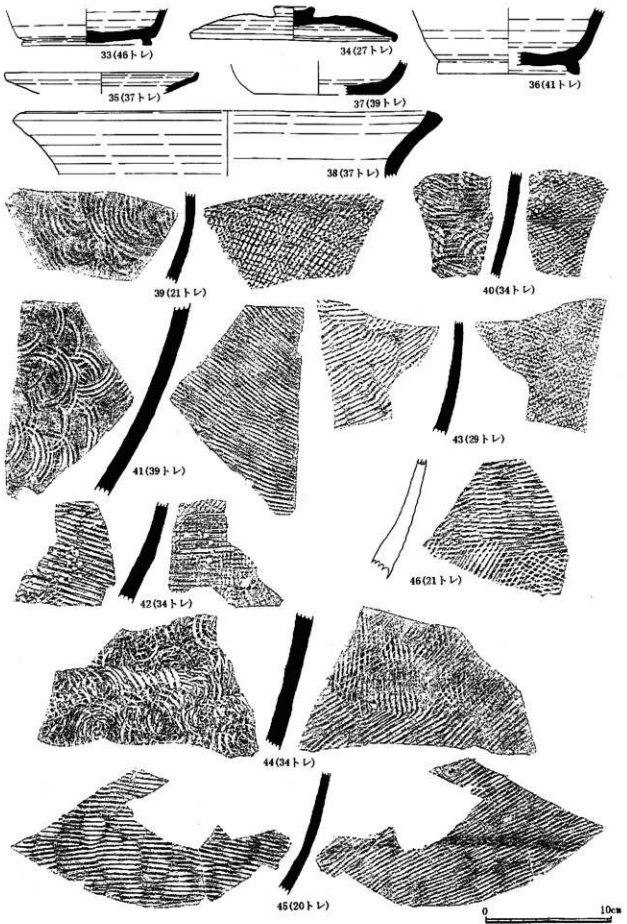
(4) 調査のまとめ

今回の調査により、馬越遺跡は平安時代の集落跡であることが明確となった。また、現在の下条川に向かうにつれ地形的に低くなる様相が窺え、南西方向に向かい立地条件が安定していくものと想定される。遺構・遺物が検出できなくなる区域を境にすると昨年度の調査結果とあわせた約12,700㎡について本調査が必要と判断され、本事業に係わる遺跡の中で最大の調査面積を有することになる。本遺跡から南西約2kmの来迎寺遺跡からはほぼ同時期の「散村的な集落景観」〔金子・田村1997〕を呈した遺跡が発掘調査されており、その比較検討も今後の大きな課題となろう。

4. 馬越遺跡第2次調査



第9図 馬越遺跡出土遺物



第10図 馬越遺跡出土遺物

Ⅲ 林道拡幅工事関連

1. 調査に至る経緯

林道拡幅工事は加茂市農林課を窓口とした加茂市の事業であるが、今回埋蔵文化財の取り扱いが問題になったところは、上条地区の大昔川に沿う林道大昔川線である。本事業工事計画地内における周知の遺跡は、大昔川上流域にある割沢遺跡（古代）と上條館跡（中世）が知られていた。今年度の工事計画では施工予定延長が140mで、割沢遺跡周辺まで工事が及ばないことから、上條館跡の取り扱いについて農林課と協議を重ねた。なお、割沢遺跡周辺については、来年度以降確認調査を実施する予定である。加茂市は平成9年6月17日付け農第835号で文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を行った。その後、市教委の他の調査日程や用地買収状況などを考慮し、11月4日から確認調査を行うことで準備を進めた。市教委は平成9年11月4日付け民資第153号で埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課長宛に行った。

上條館跡は上条城北麓の字館ノ腰に位置する。館ノ腰は「たてのこし」として文禄4（1595）年の検地帳に記載されていることから、古くからの地名であることが分かる〔関1983〕。鳴海忠夫氏は本遺跡の存在を指摘し、地籍図の検討や現地踏査から詳細な分析を加えた〔鳴海1994〕。その結果によれば、上條館跡は上条城の居館跡で60m×60mの規模を持つ方形単郭式の館であることが想定されるという。しかしながら、早くから水田として開けたためか、その痕跡を留めるものはなく、採集地点が不明確（大昔川と注記されている）な15世紀後半頃と思われる珠洲焼播鉢片が一点あるのみ（第13図）〔伊藤1995b〕であり、年代や構造などは不明な点が多い。なお、本遺跡南側の丘陵上に位置する上条城は城歴は全く不明であるが、縄張り図の検討から戦国期の城跡であることが明らかにされている。舞臺遺跡は本調査が平成8年に行われ、中世前期の集落跡および河川跡などが検出されている。このように、本区域においては中世期の遺跡が非常に密に確認されている。

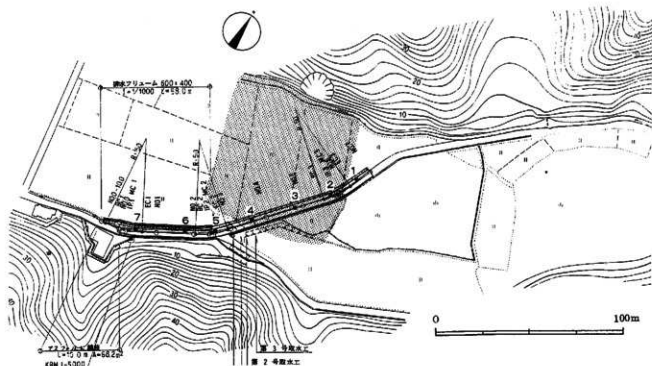
2. 上條館跡

（1）発掘調査の概要（第12図）

林道拡幅員2m×施工予定延長140mを調査対象とし、現況水田部分について2m×2mの試掘坑を0.25㎡級



第11図 上條館跡周辺の遺跡（S = 1 / 25,000）



第12図 上條館跡推定範囲と上條館跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1/2,000)

バックホーにて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。工事幅が狭いため、現林道部分内でのみバックホーを稼働させ、任意に7カ所のトレンチを設定し、約30mを調査した。調査は鬼倉遺跡本調査の合間を見て実施したが、遺構・遺物が検出されないこともあり、1日で終了した。

(2) 層序 (第14図)

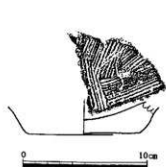
各トレンチにて異なる土層堆積状況を呈する。堆積層は主として粘土質の土であるが、中に砂利などを多く含む、大昔川の氾濫と考えられる土層もある。基盤層には礫層が多く認められ、遺構が確認されるような状況にはなかった。

(3) 遺構と遺物

今回の調査では遺構・遺物ともに全く検出できなかった。ただ、4トレンチ西壁断面に見られた溝状の掘り込みが、館の堀かと思われたが、調査面積の制約などから明らかにすることができなかった。

(4) 調査のまとめ

各トレンチからは、館跡および遺跡の存在を示す痕跡は全く確認できず、工事による埋蔵文化財への影響は特に問題ない。しかし、今回の調査面積などを考慮すると上條館跡の在否については言及できないであろう。



第13図 上條館跡周辺採集遺物



第14図 上條館跡土層柱状図

IV 民間開発関連

1. 調査に至る経緯

㈱丸五技研は大字下条字中沢地内約18,000㎡において工場新築を計画し、平成8年1月に農用地区域からの変更申請を行い、さらに平成9年8月には地元説明会を開催していた。市教委は平成9年11月に仲介業者である㈱菊田建設から工事計画地および概要を聞き、計画地内周辺に中沢遺跡が存在することから、取り扱いについて説明を求められた。中沢遺跡は、平成7年度末に県教委による詳細分布調査の結果、広範に遺物が表採され、周知化されるに及んだ。また、平成8年3月には工場建設予定地東側で行われた汚水管布設工事の際、平安時代の土器が出土し〔伊藤1997b〕、工場建設予定地での遺跡の存在は十分考えられる状況にあった。

これらと平成10年3月頃の工事着工を目指す開発側のスケジュールを勘案し、早期の遺跡確認調査が望まれた。しかし、調査員が鬼倉遺跡の本発掘調査に専従していることと、年度当初から把握した事業ではないことから、市教委は㈱菊田建設と協議を重ね平成9年12月中に確認調査を実施する、調査にかかる経費はすべて㈱菊田建設が負担することで合意し、市教委は調査の諸準備を開始した。12月中頃に土地所有者の発掘承諾書を得、鬼倉遺跡の進捗状況を踏まえ、12月17日から確認調査に入るべく民資第199号で埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課長宛に行った。

次に、石川遺跡の調査に至る経緯であるが、平成10年2月に市教委は㈱アオイ産業が進める石川2丁目地内における貴船団地造成工事（約4,000㎡）について仲介業者である㈱菊田建設から説明を受け、計画予定地が周知の遺跡である石川遺跡の範囲内にあることから、平成10年4月工事着工予定計画とあわせ早期の確認調査が要請された。市教委は3月の気象条件の良好な日に調査可能なこと、調査経費の負担などについて協議を重ね、平成10年3月下旬に調査を実施する、調査にかかる経費はすべて㈱アオイ産業が負担することで合意した。3月下旬に土地所有者の発掘承諾書を得、市教委は3月24日から確認調査に入るべく民資第28号で埋蔵文化財発掘調査の報告を県文化行政課長宛に行い、調査に向けての諸準備を開始した。また、確認調査の結果を受けて㈱アオイ産業は平成10年3月30日付けで文化財保護法第57条の2第1項の規定により、埋蔵文化財発掘の届出を文化庁長官宛に行った。

2. 中沢遺跡

(1) 発掘調査の概要（第15図）

遺跡は加茂市大字下条字中沢地内に存在し下条川右岸の沖積低地に立地する。現況は大部分が水田であるが、宅地化が進んでいる。調査は、天候や日程などを考慮し、当初は建物の工場や倉庫棟建設予定地内のみ約8,000㎡を対象にすることとし、進捗状況によって調査対象区域を拡大する方針で行った。また、遺跡の内容、本調査の必要性の有無により計画の取り止めとその場合の農地としての利用が予想されたため、埋め戻しの際に川砂を入れて点圧し、耕作への影響を考慮した。しかし、天候にも比較的恵まれたため、結果的に開発区域全域（約18,000㎡）を対象に調査を実施することができ、34トレンチ掘削し、約340㎡を調査した。

期間は12月17日～12月25日まで実施し、連日、㈱菊田建設の担当者立ち会いのもと種々ご配慮頂きながら行った。調査方法は2m×5mの試掘坑を0.4㎡のバックホー2台にて掘削を行い、遺構・遺物の検出及び土層の観察を実施した。なお、湧水が激しく遺構確認が困難であった。

また、上記汚水管布設工事の際の遺物出土状況や遺物の年代観などを念頭に置き、調査を進めたが、古代の遺

物が出土しないトレンチにて、先の403号線道路改良工事に係わる確認調査時の遺物出土層位が腐植物層より下層に古代以前の遺物が出土するという所見から、より深い層位での遺跡確認も考慮し、約2m程掘削し調査を行った。結果、数箇所で弥生土器の出土を見るに及んだ。しかし、古代の遺構・遺物が検出されたトレンチでは破壊を避けるため、それより下層の調査は行っていない。

(2) 層序(第16図)

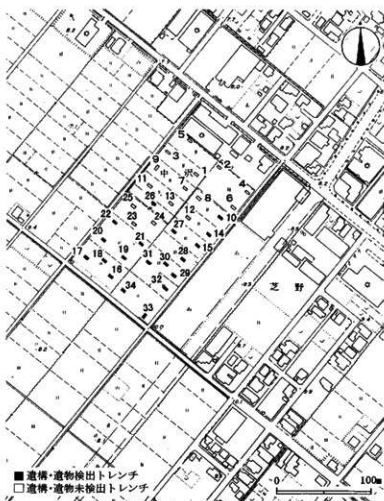
地点により異なる様相を呈する。概ね調査対象区域北部一帯のトレンチ(1~15、23~26)においては、地表下約80~110cmのところに黒褐色を呈する腐植物を多量に含む層が認められ、その下層において地山層の識別が困難な状況であった。また、10・26トレンチから散発的に土師器が1片づつ出土したのみで、地形的に北側に向かい低くなる状況が窺える。これに対し、南半部のトレンチ各所では、地表下約40~60cmの第Ⅲ層から古代の土器を中心に、中世、近世の遺物が少量出土した。なお、多量の遺物及び遺構を確認したトレンチではより下層の調査を行わなかったこともあり、包蔵する範囲については不明な点が多いが、地表下約110~170cmの腐植物層の下位から弥生土器が出土している。

(3) 遺構と遺物(第17、18図)

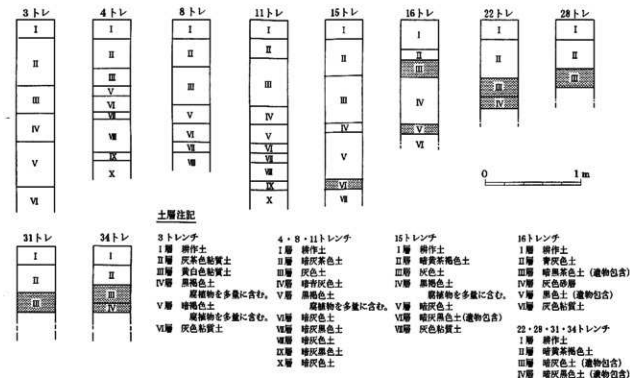
遺構は調査面積の制約や湧水などがあり、明確な把握が困難であったが、古代・中世の遺構検出面においては17・19・28・30・31・32トレンチで溝状遺構や土坑が検出された。より下層面においては16トレンチにて溝状遺構を確認した。なお、遺構の発掘は行っていない。

遺物は平安時代の土師器を中心とし、他に黒色土器、須恵器、灰釉陶器、中世陶磁器、弥生土器が出土している。弥生土器は加茂市内初の出土例である。

1~9は弥生土器である。7・8・9が15、他が14トレンチ出土資料である。1~3は有段口縁を呈する甕である。口縁線幅は1.0~2.0cmを測るが無文である。1は比較的大型で、頸部で鋭く屈曲しやや内湾気味の口縁部に至る。口径は19.0cmを測る。口縁端部外面は強くナデられる。内面はヘラケズリが施される。2、3はともに口径14.2cmを測るやや小型の甕で、最大径を口縁部を持つ。2の内面はヘラケズリが施されている。体部外面にはハケ目を留める。3は外面に炭化物が付着する。4は「く」の字口縁の甕である。端部が上方にややつまみ上げられ、面を持つ。外面に炭化物が付着する。5・6は甕底部である。ともに平底で底径3.6、3.0cmを測る。内外面にハケ目を留める。7はその開き具合から高杯受部の口縁部と考えられる。口径21.2cmを測る。8は高杯脚部である。比較的短い棒状脚に、開く裾部が付くが裾端部及び受部の形態は不明である。裾部内外面、受部外



第15図 中沢遺跡確認調査トレンチ設定図(S=1/4,000)



第16図 中沢遺跡土層柱状図

面にハケ目を留める。9は器台脚部である。筒状の脚部から裾部が開く。裾部に直径1.0cmを測る4つの円孔が穿たれる。外面は丁寧なミガキ調整が施されている。他の弥生土器に比べ非常に丁寧な作りである。

10は上記弥生土器と同じ深さの層から出土しているが、その器形から古式土器の甕と考えられる。「く」の字状にゆるく外反する口縁部を有し、最大径を口縁部に持つ。胴部内面にハケ目を留める。16トレンチ出土である。

11～26は土器無台碗である。器形を窺える資料は1点しかないが、分量、器形ともに複数のタイプが見られる。11・12はその分量などから土器小碗に分類されるものであろうか。11は口径9.8cm、底径5.0cm、器高2.6cmを測り、器高指数27、底径指数51を示す。比較的大きめの底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部が沈線状に凹む。12は口縁部片で、体部中央部位でやや屈曲する。口径11.0cmを測る。13～15は口縁が内湾しながら立ち上がり端部が外反するもので、口径は11.4～15.0cmを測る。14は端部が折り返される。16は大きめの底部から体部が直線的に立ち上がる。器高指数32、底径指数46を測る。17は器壁の薄いつくりで口縁が内湾しながら立ち上がるものである。18は口縁が内湾しながら立ち上がり、ナデ調整により口縁端部内面がやや括れるものである。

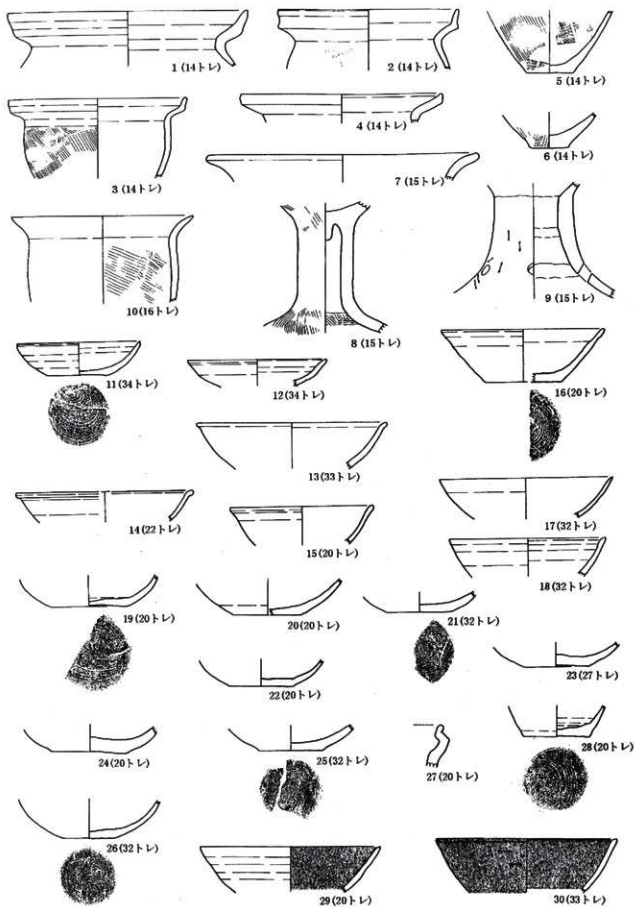
19～26は無台碗底部で底部に回転糸切りを留めるものが多く、底径4.4～6.0cmを測る。

27は甕の口縁部で、「く」の字に短く屈曲する。28は甕の底部で底径5.2cmを測る。

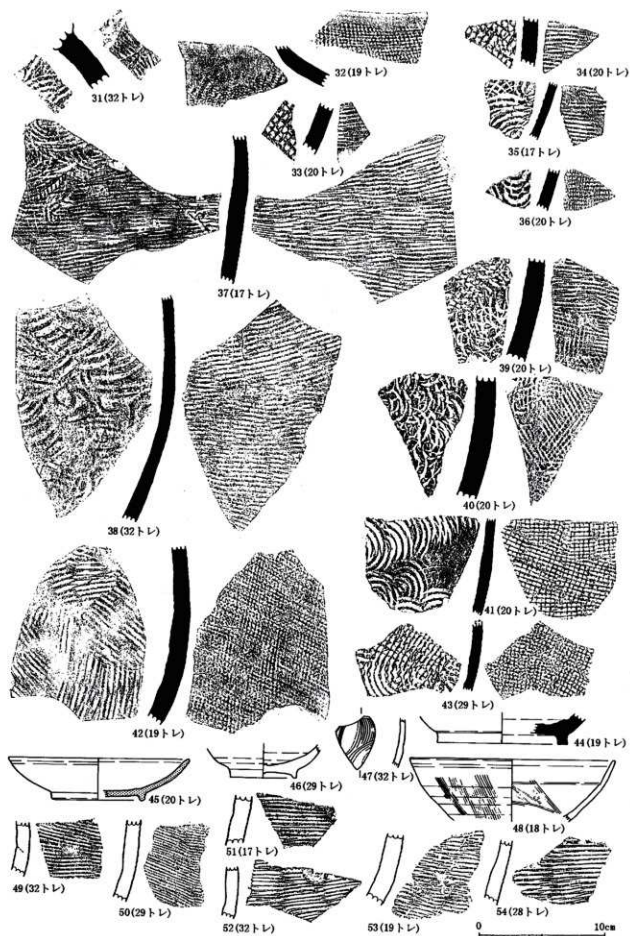
29・30は黒色土器の無台碗ないしは有台碗である。29は内面、30は内外面黒色処理が施される。口径はともに14.4cmを測る。

31～43は須恵器甕頸部および体部片である。外面平行線(31・33～35・37・38)、格子目(32・36・41～43)、綾杉文(39・40)内面同心円(31・35・36・38～41)、格子目(32～34)、平行線(42)、平行線と同心円(37)、格子目と同心円(43)のタタキが見られる。

44は壺類の底部片である。高台径は10.4cmを測る。



第17図 中沢遺跡出土遺物



第18図 中沢遺跡出土遺物

45は灰陶磁器の有台皿である。口径14.4cm、高台径6.7cm、器高3.3cmを測る。高台内側を接地面とし、低い高台から体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は外反しない。灰釉は明確でないが、同一個体と思われる破片には漬け掛けと思われる手法で施される。内外面ともロクロナデである。胎土は緻密で灰白色を呈する。焼成は不良で軟質感を受ける。その調整手法、器形から大原2号窯式後半〔斎藤1994〕に対比されるものと考えられる。

46～54は中世陶磁器である。46は白磁碗の高台部である。低い高台から体部が内湾しながら立ち上がる。高台径は5.2cmを測る。ややくすんだ白色を呈する。47は青白磁梅瓶の体部片で、小片のため文様は不明である。外面は緑色がかかった水色を呈する。48は同安窯系青磁碗Ⅰ類である。体部は内湾しながら立ち上がり、口径16.4cmを測る。外面に細かい櫛目を有し、内面には沈線が入る。釉色は黄色味がかかった緑色を呈する。これら46～48の貿易陶磁器は概ね12～13世紀代に位置づけられる。49～54は珠洲焼壺体部片である。外面に比較的目の細いタタキ目が見られる。比較的古手の珠洲焼の特徴と見られ、中世前期の所産であろう。

(4) 調査のまとめ

以上から、本地点には弥生時代から平安時代を主体とし、中世期にいたる人間の活動痕跡が明らかになった。弥生時代遺跡確認は加茂市内では初例であり、沖積地に古墳期以前の遺跡が存在することが確認できた意義は大きい。しかも、平安期以降の遺構確認面からさらに深い層位に存在し、今後の周辺部での調査方法に注意を促すものとなる。今回の調査結果からは、調査対象区域のほぼ南半部の約10,000㎡×2層＝約20,000㎡について本発掘調査が必要と判断される。なお、現在は工場建設計画は中止となり、本発掘調査を行う必要性はない。

3. 石川遺跡

(1) 発掘調査の概要(第19図)

石川遺跡は加茂市大字石川地内で加茂川左岸の沖積地に展開する遺跡である。その存在は比較的古くから知られ、土師器・須恵器が「戦後の土地改良工事中地下70層位の所より発見」〔八百枝1975〕されたという。その一部の遺物について紹介されているが、古式土師器〔伊藤1996b〕、珠洲焼〔伊藤1995b〕があり古墳～中世の遺物が出上している。しかし、その正確な出土地点は把握されていない。その後、平成7年の詳細分布調査により若干の遺跡推定範囲の変更が見られ今日に至っている。調査は宅地造成計画地内全域(約4,000㎡)を対象にし2m×5mの試掘坑を0.4㎡のバックホーにて掘削し、遺構・遺物の検出及び土層の観察を行った。なお、これまでの確認調査の状況などからより深い層位での遺物出土に留意すべく調査を進めたが、現況水田地帯に約50cm程の盛土がされており、遺構確認面の精査は難しい状況であった。調査は3月24日～3月25日の2日間で終了した。また、㈱アオイ産業の担当者立ち会いのもと調査を実施した。

(2) 層序(第20図)

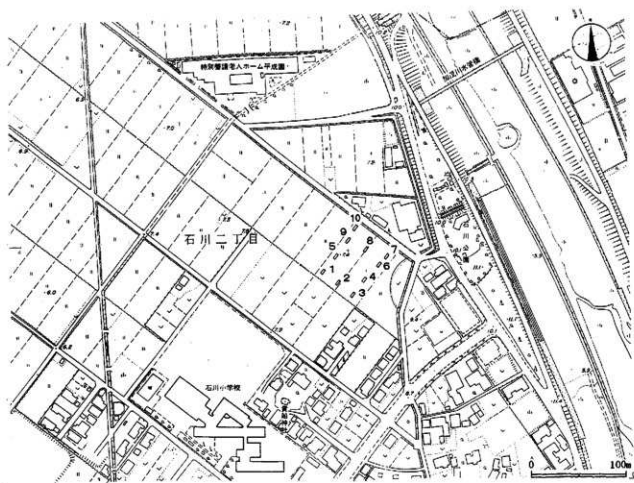
各トレンチにてほぼ同様の上層堆積状況を呈する。現況において約50cm程の盛土がされ、その下に水田面がある。耕作上下には腐植物を多量に含む層が厚く堆積し、遺構確認面まで掘削できない状況であった。地形的に低い場所であったことが想定される。

(3) 遺構と遺物

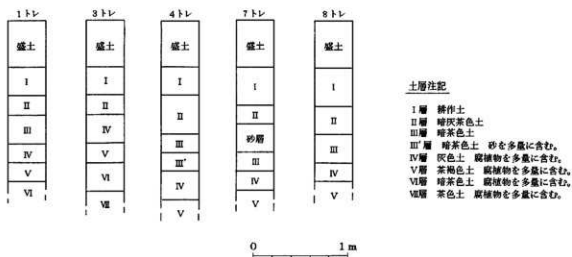
今回の調査対象区域内においては遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

(4) 調査のまとめ

以上の結果から、今回の調査対象区域内においては遺跡は存在しないものと判断でき、工事による埋蔵文化財への影響は特にないものと考えられる。



第19図 石川遺跡確認調査トレンチ設定図 (S = 1 / 4, 000)



第20図 石川遺跡土層柱状図

V ま と め

1. 中沢遺跡出土弥生土器と周辺の弥生時代の遺跡について（第21図）

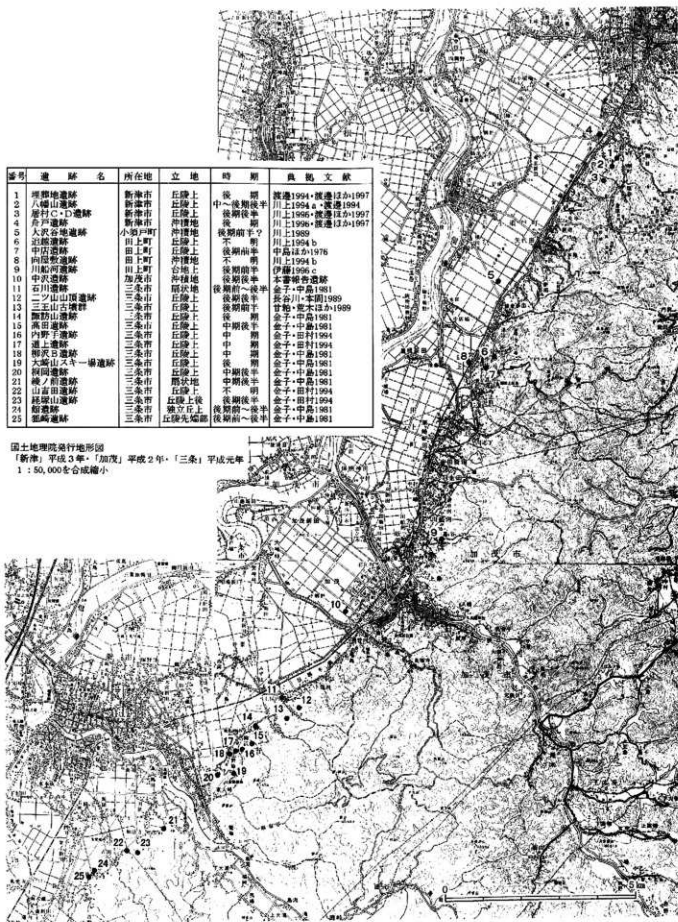
中沢遺跡から出土した弥生土器は、少量ながらも加茂市においては初の弥生時代の遺物であること、周辺地域においても比較的出土数の少ない遺物であることなどから、該区域においては重要な資料となる。ここではもう一度諸特徴を概観し、その年代について考えてみたい。しかし、いわゆる一括土器のような同時代性の強い資料ではなく点数も少ないことから、器種組成比率や調整手法比率といった様相差を見いだすことは不可能であり、あくまで形態的な特徴などから、これまでに示された編年案に照らし合わせて位置づけるものであることをお断りしておきたい。また、あわせて本遺跡周辺における弥生時代の遺跡がどのように展開しているのかを現段階で管見に触れた遺跡を概観する。

検出された土器の器種は甕6、高杯2、器台1である。甕の口縁部は有段口縁を呈し、有段部はやや外傾気味のもの（1、3）、直立するもの（2）、「く」の字を呈し上端部がややつまみ上げられ、面を持つもの（4）があり有段口縁のものは口縁縁帯幅は1.0～2.0cmと狭い。そして、いわゆる擬凹線文などの文様は認められない。底部は平底である（5、6）。内面調整は1、2の資料においてヘラケズリが見られる。高杯は受部の形態は小片のため不明であるが、有段口縁を呈するものであろうか（7）。脚部は比較的短小な棒状脚を呈し、裾部は緩やかに外反する（8）。器台は受部の形態は不明であるが、中空筒状の脚部から裾部は緩やかに外反する。外面は入念にミガキ調整が施され、重厚な感じを有する（9）。

これらの土器は有段口縁甕や棒状脚の高杯などから、大きくは弥生後期後半に位置づけられよう。新潟県における該期の土器変遷については、西山町内越遺跡〔坂井ほか1983〕の成果を端緒とし、資料の充実した柏崎平野の遺跡によって概ね組み立てられている〔品田1990a, 品田1990b, 滝沢ほか1992, 品田1996〕。中沢遺跡の位置する南蒲原地方とは当然地域差が想定され、安易な対比は慎むべきであろうが、中沢遺跡出土資料は近年の品田氏の変遷試案〔品田1996〕の第11期～12期に対比でき、後期後半でも前半段階に位置づけられるものと考えられる。これらは北陸地方の土器様式である法仏式に含まれ、法仏式でも古相の部類に属するものと思われる。しかし、8の棒状高杯脚部および9の中空筒状の器台脚部は該段階の形態と異なり、地域差の可能性もあるが他の甕などと出土地点が異なることも考慮するとやや遅る時期のものである可能性も指摘できよう。

次に周辺の弥生時代の遺跡について概観したい。対象とした範囲はいわゆる東山丘陵西側縁辺部から信濃川までと阿賀野川、五十嵐川に区切られた区域で、行政区域では新津市～三条市までを含む。該区域は次の古墳時代において、古津八幡山古墳（新津市）、円塚古墳（小須戸町）、エゾ塚古墳（田上町）が確認されている新津丘陵ブロック、保内三王山古墳群（三条市）、宮ノ浦古墳（加茂市）が確認されている三条市北部～加茂市にかけてのブロックに相当し、政治的なまとまりが想定されている〔甘粕1986, 鶴巻1993ほか〕。ここで概観する遺跡分布状況はこれらの政治的ブロック形成前夜・前段階の状況を検討するひとつの材料となろう。

第21図には新津市4遺跡、小須戸町1遺跡、田上町4遺跡、加茂市1遺跡、三条市15遺跡の合計25遺跡を示したが、三条市に濃密に分布する状況が窺える。これは、発掘調査・分布調査の疎密の差が大きく影響していることも考えられるが、保内三王山古墳群との関連もあり、分布状況の偏りとその背景の問題については今後の検討課題としたい。さて、遺跡の立地を概観すると、ほとんどの遺跡が丘陵ないしは台地上に確認され、沖積地で確認されている遺跡は極めて少ないことが分かる。遺跡は時期不明なものも多いが中期後半から見られ、後期を主体とする。発掘調査され、いわゆる高地性環壕集落が検出された新津市八幡山遺跡、三条市経塚山遺跡を除き、



第21図 中沢遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布図 (S = 1/100,000)

該期の明確な居住遺構は少ない。また、別時期を主体とする遺跡の発掘調査で、明確な遺構に伴わない形あるいは土坑などから、天王山式土器が出土する事例が多いようである。

これらの弥生時代の遺跡立地条件に関しては、他区域においてすでに多くの指摘があるが、田中靖氏によって見附市～長岡市にかけての東山丘陵西麓の状況、寺泊町～和島村にかけての島崎川流域における状況が明らかにされている〔田中1985, 田中1989〕。それによれば、やはり台地や丘陵上に選地する遺跡が多く、新津・三条間の状況と一致する。しかしながら、これらの区域においても沖積地に立地する遺跡の数は少なく、内容もほとんど不明である。それは、今回の中沢遺跡の状況からも明らかのように、厚く堆積した土層に阻まれその存在が不鮮明になっていることも大きな要因であろう。それ故、今回、沖積地に立地する中沢遺跡から弥生時代後期の遺物が発見されたことは、該地域において少なからず意義あることと思われる。

2. 馬越遺跡・中沢遺跡出土の平安時代土器について

ここでは、馬越遺跡・中沢遺跡の主體的時期である古代の土器について、諸特徴を概述し、その編年の位置付けについて考えたい。なお、確認調査であること、破片での出土が多いことなどから組成比率の検討や法量の比較検討が欠落していることを断っておきたい。

馬越遺跡では土師器食膳具の無台碗・皿？、煮炊具の甕・鍋、黒色土器食膳具の無台碗・有台碗、須恵器食膳具の無台杯・有台杯・杯蓋、貯蔵具の壺、甕が検出されている。土師器無台碗は器形を窺える資料は1点(1)のみであるが、口径12.2cm、底径5.0cm、器高4.1cmを測り、器高指数34、底径指数41を示す。底外は回転糸切りを施すものがほとんどであり、体部下半にロクrezリが見られるものが1点(6)存在する。甕は長甕、小甕が確認でき、口縁部は「く」の字に屈曲し、端部に面を持つもの、上方につまみ上げられ面を持つものが多い。須恵器無台杯は比較的肉厚で口縁部の立ち上がり急なものと比較的大振りで、口縁部の開きが大きいもの二者が確認できる。これらの、須恵器杯類は胎土の特徴などからいわゆる佐渡小泊窯産と考えられる。また、詳細は不明ながら瓶類と思われる灰釉陶器が1点出土している。

中沢遺跡では土師器食膳具の無台碗を中心に、黒色土器、甕が若干と須恵器貯蔵具の壺が出土している。須恵器食膳具は全く検出されていない。土師器無台碗では口縁端部が外反するものが目立つ。底部調整は回転糸切りがほとんどである。甕の口縁部は屈曲したものになる。また、本土器群の年代比定に大きな影響を及ぼすと思われる灰釉陶器皿が1点出土している(45)。本資料の特徴は、口縁端部が外反しない、体部は内湾しながら立ち上がる、粗雑な作りである、釉薬は漬け掛け手法によるなどの特徴が認められ、大原2号窯式後半〔斎藤1994〕に対比できるものと考えている。

馬越遺跡出土土器は該様相のうち特に、須恵器佐渡小泊窯産無台杯及び土師器甕の口縁部の形態を指標にすれば、蒲原郡域では新潟市の小丸山遺跡SD2及びSD4・5出土土器群に対比されると考えられ、9世紀後半～10世紀初頭頃の年代が与えられよう〔春日1997a, 春日・上野1997〕。中沢遺跡出土土器は土師器無台碗及び甕の口縁部形態、大原2号窯式後半の灰釉陶器皿の存在、さらには須恵器食膳具の未検出を勘案すると、近年春日氏が組み立てられた10・11世紀の土器編年〔春日1997b〕の2期～3期に対比でき、概ね10世紀中葉前後に比定できるものと思われる。

以上、断片的な資料ではあるが、概ね遺跡の年代が推定できると思われる。末報告ではあるが、昨年本発掘調査を行った鬼倉遺跡が9世紀前半～中頃、馬越遺跡が9世紀後半～10世紀初頭頃、中沢遺跡が10世紀中葉前後に比定でき、非常に近接した区域内に存在する各遺跡が比較的短期間に廃絶し、それぞれ時期的に重ならない状況で立地していることが指摘できそうであるが、周辺の遺跡からの資料の増加を待って再度検討したい。

凡例

法 量 口 口徑 底=底径 高=器高
胎 上 右=右英 長=長石

丸瀕遺跡

番号	出土位置	種別	器種	部位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形・調 整	備 考
1	15 トレンチ	古式土師器	甕	口縁部	口15.6	石・砂礫	明褐	不良		円孔
2	13 トレンチ	古式土師器	甕	口縁部	口19.4	石・砂礫	暗褐	普通		
3	14 トレンチ	古式土師器	甕	底部	底3.0	石・砂礫	浅黄褐色	普通		外スス
4	14 トレンチ	古式土師器	甕	底部	底1.4	石・砂礫	黒褐	普通	外ハケ	
5	19 トレンチ	古式土師器	鉢	口～体部	口15.6	石・砂礫	暗褐	普通		外スス
6	19 トレンチ	古式土師器	鉢	口～体部	口14.0	石・砂礫	暗褐	普通		
7	14 トレンチ	古式土師器	鉢	口～体部	口14.4	石・砂礫	浅黄褐色	普通		
8	14 トレンチ	古式土師器	?	底部	底5.6	石・砂礫	浅黄褐色	普通		

新道遺跡

番号	出土位置	種別	器種	部位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形・調 整	備 考
1	12 トレンチ	古式土師器	甕	口縁部	口13.8	石・砂礫	暗褐	不良		外スス
2	9 トレンチ	古式土師器	甕	胎部		石・砂礫	暗	普通	胎外ミガキ、胎内ハケミ	円孔
3	9 トレンチ	古式土師器	甕	胎部	胎9.6	石・砂礫	暗	普通	胎外ミガキ	円孔
4	22 トレンチ	須恵器	甕	体部		石・白色粒	暗青灰	普通	外格子、内同心円タタキ	

馬越遺跡

番号	出土位置	種別	器種	部位	法 量	胎 土	色 調	焼成	成 形・調 整	備 考
1	36 トレンチ	土師器	無台鉢	口～底部	口12.2 底5.0 高4.1	石・灰・砂礫	明褐	普通	底外面転糸切り	外スス
2	28 トレンチ	土師器	無台鉢	口縁部	口15.2	石・灰	浅黄褐色	普通		
3	28 トレンチ	土師器	無台鉢	底部	底5.4	石・灰	暗	普通	底外面転糸切り	
4	29 トレンチ	土師器	無台鉢	底部	底5.8	石・灰	暗	普通	底外面転糸切り	
5	34 トレンチ	土師器	無台鉢	底部	底4.4	石・灰	暗褐	普通	底外面転糸切り	内スス
6	34 トレンチ	土師器	無台鉢	底部	底5.8	石・灰・砂礫	浅黄褐色	普通	体外ロケツズリ、底外面転糸切り	
7	28 トレンチ	土師器	皿?	口縁部	口18.0	石・灰	暗	普通		
8	41 トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・灰・砂礫	暗	普通		
9	46 トレンチ	土師器	甕	口縁部	口20.6	石・灰・砂礫	明褐	普通		
10	35 トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・灰・砂礫	明褐	普通		
11	46 トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・灰・砂礫	明褐	不良		
12	28 トレンチ	土師器	甕	口～体部	口26.0	石・灰・砂礫・金雲母	暗	普通		外スス
13	36 トレンチ	土師器	甕	口縁部	口24.0	石・灰	明褐	普通		
14	47 トレンチ	土師器	甕	口縁部	口17.8	石・灰・砂礫	黄褐色	普通		
15	34 トレンチ	土師器	甕	口縁部	口17.6	石・灰・砂礫	暗	普通		内スス
16	32 トレンチ	土師器	甕	底部	底3.3	石・灰・砂礫	黄褐色	普通	底外面転糸切り	内スス
17	34 トレンチ	土師器	甕	底部	底6.0	石・灰・砂礫	黄褐色	普通	底外面転糸切り	
18	34 トレンチ	土師器	甕	底部	底6.6	石・灰・砂礫	黄褐色	不良	底外面転糸切り	内スス
19	34 トレンチ	土師器	鉢	口縁部	口33.4	石・灰・砂礫・金雲母	暗	普通		
20	28 トレンチ	土師器(黒色土器)	無台鉢	口縁部	口(18.0)	石・灰	暗褐	普通	内面黒色処理	
21	34 トレンチ	土師器(黒色土器)	無台鉢	底部	底5.0	石・灰	明褐	普通	内面黒色処理、底外ハケタタキ	
22	28 トレンチ	土師器(黒色土器)	有台鉢	高合部	高合5.2	石・灰・砂礫		不良	内外面黒色処理	
23	45 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	口11.8 底7.0 高2.7	白色粒・黒斑	暗青灰色	普通	底外ヘラ切り	外スス
24	34 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	口12.8 底7.0 高2.9	白色粒	灰色	普通		
25	34 トレンチ	須恵器	無台杯	口縁部	口13.6	白色粒	灰色	普通		
26	39 トレンチ	須恵器	無台杯	口～底部	口12.4 底8.8 高3.3	白色粒	黄灰色	普通	底外ヘラ切り	黒斑痕
27	34 トレンチ	須恵器	無台杯	口～体部	口13.2	白色粒・黒斑	灰色	普通		
28	39 トレンチ	須恵器	無台杯	底部	底6.6	砂礫・白色粒	灰白色	普通		
29	39 トレンチ	須恵器	無台杯	底部	底7.4	白色粒	灰色	普通		
30	44 トレンチ	須恵器	無台杯	底部	底8.2	砂礫・白色粒	暗灰	不良	底外ヘラ切り	
31	34 トレンチ	須恵器	有台杯	口縁部	口13.9	白色粒	黒灰	不良		
32	39 トレンチ	須恵器	有台杯	高合部	高合6.4	白色粒	灰色	普通		
33	46 トレンチ	須恵器	有台杯	高合部	高合10.2	白色粒	灰色	普通		
34	27 トレンチ	須恵器	杯蓋	つまみ～口	つまみ3.2 口16.4 高2.7	白色粒・黒斑	青灰色	普通	天井部ロケツズリ	
35	37 トレンチ	須恵器	皿?	口縁部	口15.4	石・砂礫	灰白色	不良		
36	41 トレンチ	須恵器	壺	底部	底合11.4	白色粒	黒灰	不良		
37	39 トレンチ	須恵器	壺	底部	底10.2	砂礫・白色粒	灰白色	不良		
38	37 トレンチ	須恵器	甕	口縁部	口(32.0)	砂礫	灰色	不良		自然輪
39	21 トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	灰色	普通	外格子、内同心円タタキ	
40	34 トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	暗赤褐色	不良	外格子、内同心円・平行タタキ	
41	39 トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	灰白色	普通	外平行、内同心円タタキ	
42	34 トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	暗赤褐色	不良	外格子、内平行タタキ	
43	29 トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	灰色	普通	外格子、内平行タタキ	
44	34 トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗褐色	不良	外輪形、内同心円タタキ	
45	20 トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	暗灰色	普通	外内平行タタキ	
46	21 トレンチ	須恵器	壺	体部		砂礫	暗青灰色	不良	外輪形タタキ	

第2表 遺物観察表

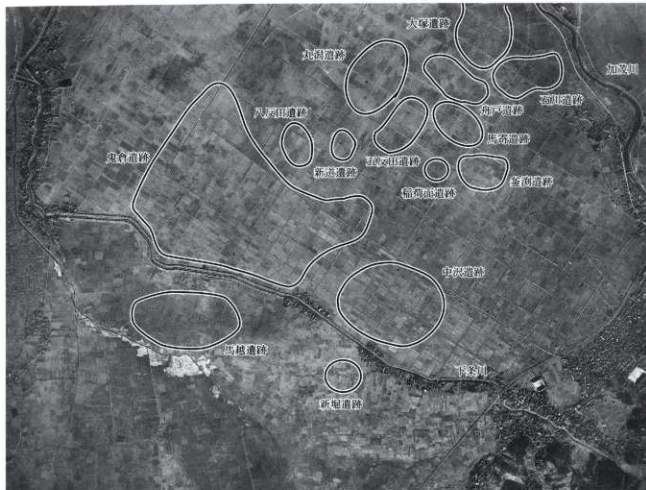
中沢遺跡

番号	出土位置	種別	器種	部位	法	土	色調	焼成	成形・調整	備考
1	14トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□19.0	石・灰・砂礫	淡褐	不良	体内ヘラケズリ	
2	14トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□14.2	石・灰・砂礫	淡褐	普通	体内ヘラケズリ、体内ハケメ	
3	14トレンチ	弥生土器	甕	口縁部	□14.2	石・灰	灰	普通	体内ハケメ	外スス
4	14トレンチ	弥生土器	甕	1/4部	□16.0	石・灰・砂礫	褐	不良		外スス
5	14トレンチ	弥生土器	甕	底部	底3.6	石・灰・砂礫	淡褐	普通	体内ハケメ	
6	14トレンチ	弥生土器	甕	底部	底3.0	石・灰・砂礫	淡褐	普通	体・底外ハケメ	
7	15トレンチ	弥生土器	高杯	受部	受21.2	石・灰・砂礫	淡褐	普通		
8	15トレンチ	弥生土器	高杯	胴部		石・灰・砂礫	淡褐	普通	内外ハケメ	
9	15トレンチ	弥生土器	高杯	胴部		石・灰・砂礫	淡褐	良好	外エガキ	内孔
10	16トレンチ	古式土師器	甕	口縁部	□14.4	石・灰・砂礫	褐	不良	体内ハケメ	
11	34トレンチ	土師器	無台碗	口～底部	□9.8 底5.0 高2.6	石・灰	明褐	普通		
12	34トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	□11.0	石・灰	明褐	普通		
13	33トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	□15.0	石・灰	褐	普通		
14	22トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	□(14.0)	石・灰	明褐	普通		
15	20トレンチ	土師器	無台碗	口縁部	□11.4	石・灰・砂礫	淡黄橙	不良		
16	20トレンチ	土師器	無台碗	口～底部	□13.0 底6.0 高4.2	石・灰・砂礫	褐	不良	底外回転承切り	底外スス
17	32トレンチ	土師器	無台碗	1/4部	□13.8	石・灰	普通			
18	32トレンチ	土師器	無台碗	1/4部	□12.4	石・灰・砂礫	淡黄橙	普通		
19	20トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.0	石・灰・砂礫	淡黄橙	不良	底外回転承切り	
20	20トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.5	石・灰・砂礫	褐	不良		
21	32トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.4	石・灰	淡黄橙	普通	底外回転承切り	
22	20トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.2	石・灰・砂礫	褐	不良		
23	27トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.2	石・灰	明褐	普通		
24	20トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.0	石・灰・砂礫	褐	不良		
25	32トレンチ	土師器	無台碗	底部	底5.0	石・灰・砂礫	淡黄橙	普通	底外回転承切り	
26	32トレンチ	土師器	無台碗	底部	底4.4	石・灰・砂礫	淡黄橙	普通	底外回転承切り	
27	20トレンチ	土師器	甕	口縁部		石・灰・砂礫	褐	普通		
28	20トレンチ	土師器	甕	底部	底5.2	石・灰・砂礫	褐	不良	底外回転承切り	
29	20トレンチ	土師器(黒色土器)	無台碗?	1/4部	□14.4	石・灰・砂礫	淡黄橙	不良	内面黒色地層	
30	33トレンチ	土師器(黒色土器)	無台碗?	口縁部	□14.4	石・灰・砂礫		普通	内外面黒色地層	
31	32トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	灰色	普通	外平行、内同心円タタキ	
32	19トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	灰色	普通	内外格子タタキ	
33	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	灰色	普通	外平行、内格子タタキ	
34	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	灰色	普通	外平行、内格子タタキ	
35	17トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	灰色	普通	外平行、内同心円タタキ	
36	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗青灰色	普通	外格子、内同心円タタキ	
37	17トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗青灰色	普通	外平行、内平行・同心円タタキ	内スス
38	32トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗灰褐色	不良	外平行、内同心円タタキ	
39	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	灰色	普通	外縁杉、内同心円タタキ	
40	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	灰色	普通	外縁杉、内同心円タタキ	
41	20トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗灰色	普通	外格子、内同心円タタキ	
42	19トレンチ	須恵器	甕	体部		砂礫	暗灰色	普通	外格子、内平行タタキ	
43	29トレンチ	須恵器	甕	体部		白色粒	暗赤褐色	普通	外格子、内格子・同心円タタキ	
44	19トレンチ	須恵器	甕	底部	高台10.4	白色粒	明灰色	不良		
45	20トレンチ	灰釉陶器	甕台皿	口～底部	□14.4 台6.7 高3.3		灰白色	普通	漬け掛け	家産物?
46	29トレンチ	白磁	甕	底部	高台5.2		灰白色	普通		乳白地物
47	32トレンチ	青白磁	胸瓶	体部			精良	灰色	普通	淡青褐色地
48	18トレンチ	青磁	甕	口縁部	□16.4		精良	灰色	普通	外面欄目文、内面沈線
49	32トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石	暗灰色	普通	細かいタタキ	外自然物
50	29トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・砂礫	灰色	普通	細かいタタキ	
51	17トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・砂礫	灰色	不良	細かいタタキ	
52	32トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石	灰色	普通		
53	19トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・砂礫	灰色	不良		
54	28トレンチ	珠洲焼	甕	体部		石・砂礫	暗灰色	普通		

【引用・参考文献】

- 甘粕 健 1986 「古墳時代の社会と文化」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 甘粕健・荒木勇次ほか 1989 「保内三王山古墳群 測量・発掘調査報告書」三条市教育委員会
- 伊藤秀和 1995 a 「加茂市役所遺跡」加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1995 b 「加茂市における中世の遺跡について(一)」『加茂郷土誌』第18号 加茂郷土調査研究会
- 伊藤秀和 1996 a 「平成7年度加茂市内遺跡確認調査報告書 屋敷田遺跡 上谷地内 草生津遺跡」加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1996 b 「加茂市石川遺跡出土の練刺付き土師器について」『越佐補遺誌』創刊号 越佐補遺誌の会
- 伊藤秀和 1996 c 「川船河遺跡」田上町教育委員会
- 伊藤秀和 1997 a 「平成8年度加茂市内遺跡確認調査報告書 丸高遺跡 鬼倉遺跡 馬越遺跡 蚊口太遺跡 寺屋敷跡 馬寄遺跡」加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 1997 b 「加茂市中沢遺跡出土の土器について」『越佐補遺誌』第2号 越佐補遺誌の会
- 春日真実・上野一久 1997 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会・90新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 a 「越後・佐渡における9世紀中葉の前期」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1997 b 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 金子拓男・中島栄一 1981 「考古」『三条市史 資料編第一巻 考古・文化』三条市
- 金子正典・田村浩司 1994 「鏡ノ前・葛瀬沢遺跡」三条市教育委員会
- 金子正典・田村浩司 1997 「米迎寺遺跡」三条市教育委員会
- 加茂市史編纂委員会 1975 「加茂市史 下巻」加茂市
- 川上貞雄ほか 1987 「東部地区遺跡詳細分布調査報告書」加茂市教育委員会
- 川上貞雄 1989 「大沢谷内遺跡発掘調査報告書」小須戸町教育委員会
- 川上貞雄 1994 a 「八幡山遺跡Ⅰ 遺構編」新津市教育委員会
- 川上貞雄 1994 b 「二 田上町の弥生遺跡」『田上町史 通史編』田上町
- 川上貞雄 1995 「舟戸遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会
- 川上貞雄 1996 「金津丘陵製鉄遺跡群 居村B・D地区」新津市教育委員会
- 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産一製法を以て中心に」『古代の土器研究—律令的土器研究—』『古代の土器研究』
- 坂井秀弥ほか 1983 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第33集 内越遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 品田高志 1987 「西岩野」柏崎市教育委員会
- 品田高志 1990 a 「越後における後期弥生土器の変遷—柏崎平野における後期後半期を中心にして—」『新潟考古学談話会会報』第5号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1990 b 「越後の後期弥生土器とその遷移—柏崎平野における北陸系土器群と人の移動—」『新潟考古学談話会会報』第6号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1991 「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ—前期土器編年の現状と編年試案—」『柏崎市立博物館館報』No.6 柏崎市立博物館
- 品田高志 1996 「越後」『YAY. 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会
- 関 正平 1983 「文津四年上条村検地帳」『加茂郷土誌』第6号 加茂郷土調査研究会
- 滝沢規朗ほか 1992 「西谷遺跡発掘調査報告書」刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗 1995 「古墳出現前後における集落の動向—越後の集落を考える上での基礎整理として—」『研究紀要』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人 1986 「津町遺跡出土土器の編年の考察」『津町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
- 田中 靖 1985 「東山丘陵西麓採集の弥生時代及び古墳時代の遺物」『三条考古学研究会機関誌』第3号 三条考古学研究会
- 田中 靖 1989 「島崎川流域における弥生時代の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 田中 靖 1995 「門新遺跡」和島村教育委員会
- 田畑 弘 1994 「道下・白地遺跡」田上町教育委員会
- 鶴巻康志 1993 「越後における前期古墳の概要」『日本考古学協会1993年度新潟大会 シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 中島栄一・駒形敏朗・八百枝茂 1973 「刈刈遺跡調査報告書」加茂市教育委員会
- 中島栄一ほか 1976 「中店遺跡」田上町教育委員会
- 中島栄一 1981 「その他の主要遺跡」『三条市史 資料編第一巻 考古・文化』三条市
- 鳴海忠夫 1994 「加茂市上条城跡について—要害の縄張りを中心として—」『加茂郷土誌』第17号 加茂郷土調査研究会
- 長谷川三三夫・本間桂吉 1989 「三条市ニッ山遺跡と表掘遺物について」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 八百枝茂 1975 「古墳時代以降の遺跡」『加茂市史 上巻』加茂市
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期における土器について」『北陸の考古学』1
- 山下隆司 1995 「灰化陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 吉岡泰輔 1991 「北陸弥生土器の編年と面期」『日本海地域の土器・陶磁器 古代編』六興出版
- 渡邊明和 1994 「八幡山遺跡発掘調査報告書—平成6年度範囲確認調査—」新津市教育委員会
- 渡邊明和ほか 1997 「金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 居村遺跡E・A・C地点、大入遺跡A地点」新津市教育委員会

写 真 图 版



平野部の遺跡周辺の空中写真



丸瀨遺跡近景 北から



調査風景



13トレンチ土層断面 東から



15トレンチ土層断面 東から



16トレンチ土層断面 北から



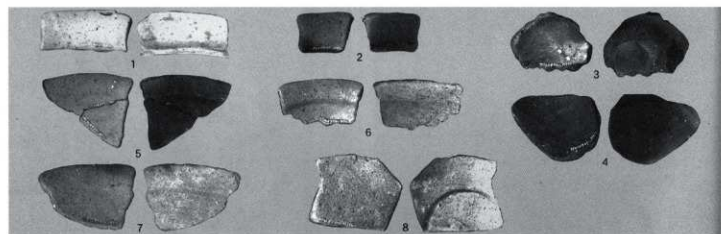
17トレンチ土層断面 北から



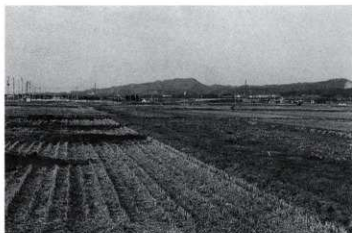
19トレンチ土層断面 北から



20トレンチ土層断面 西から



丸渦遺跡出土遺物



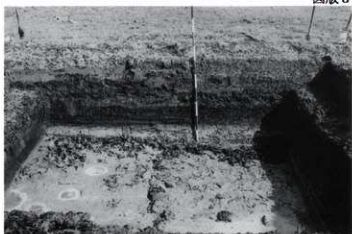
新道遺跡近景 西から



調査風景



9 トレンチ土層断面 西から



10 トレンチ土層断面 西から



11 トレンチ土層断面 東から



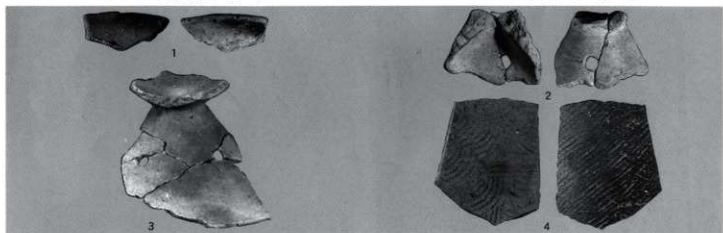
12 トレンチ土層断面 南から



22 トレンチ土層断面 南から



23 トレンチ土層断面 東から



新道遺跡出土遺物



馬越遺跡近景 北から



調査風景



19トレンチ土層断面 西から



20トレンチ土層断面 西から



22トレンチ土層断面 東から



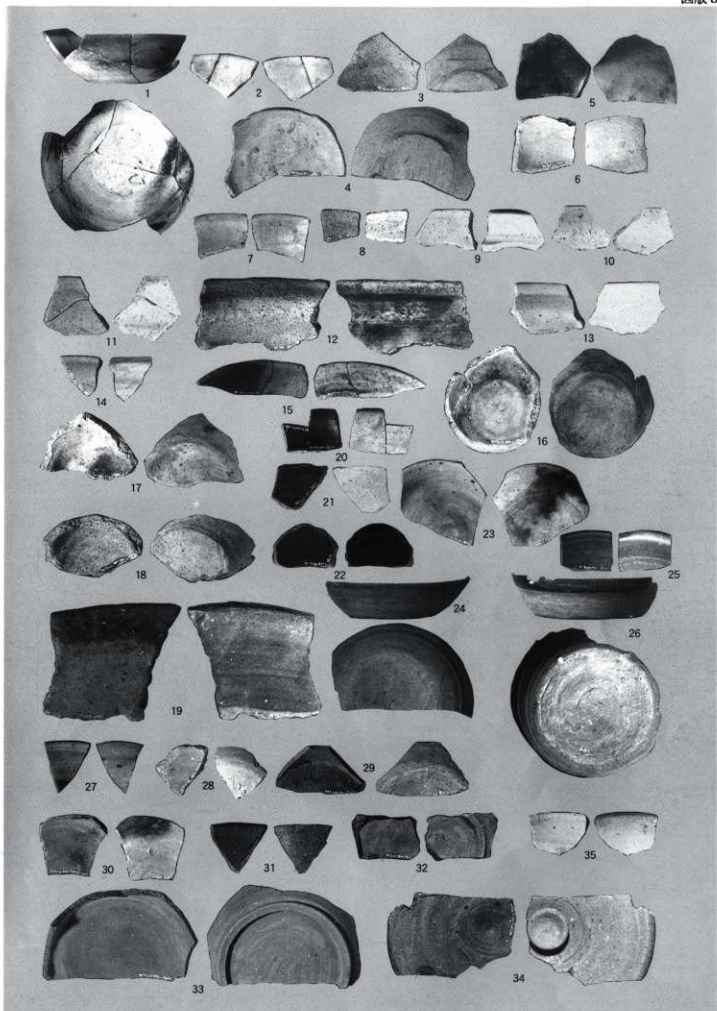
31トレンチ土層断面 西から



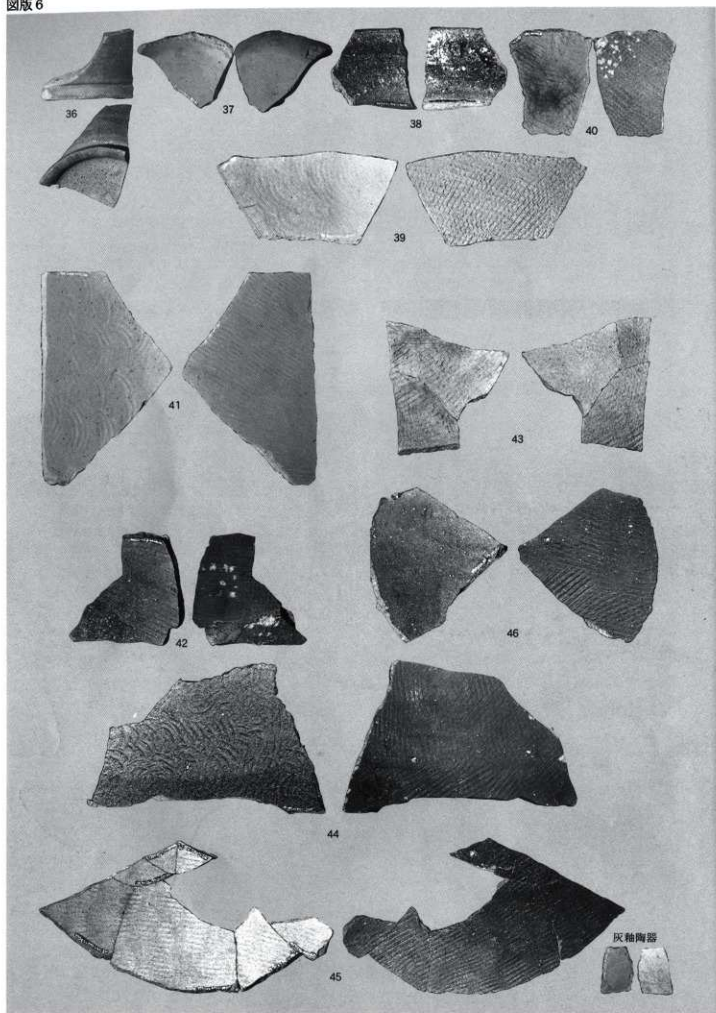
32トレンチ土層断面 西から



45トレンチ土層断面 南から



馬越遺跡出土遺物



馬越遺跡出土遺物



上條館跡近景 東から



調査風景



4 トレンチ土層断面 北から



6 トレンチ土層断面 南から



中沢遺跡近景 南西から



調査風景



調査風景



14 トレンチ土層断面 東から



15トレンチ土層断面 南から



19トレンチ土層断面 東から



20トレンチ土層断面 西から



28トレンチ土層断面 北東から



30トレンチ土層断面 西から



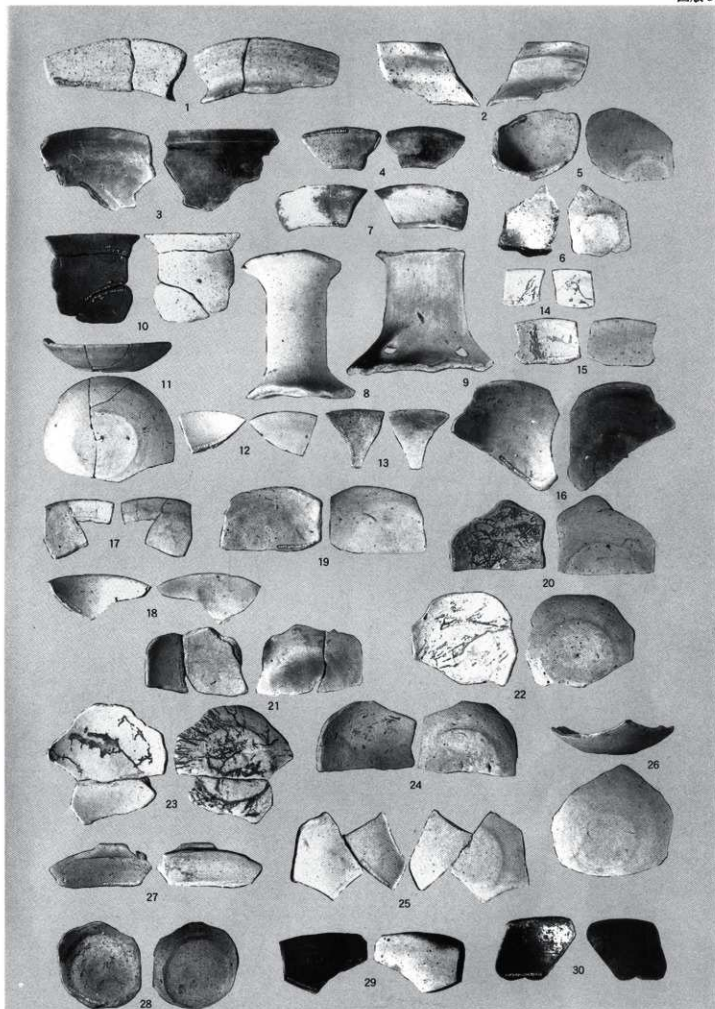
32トレンチ土層断面 西から



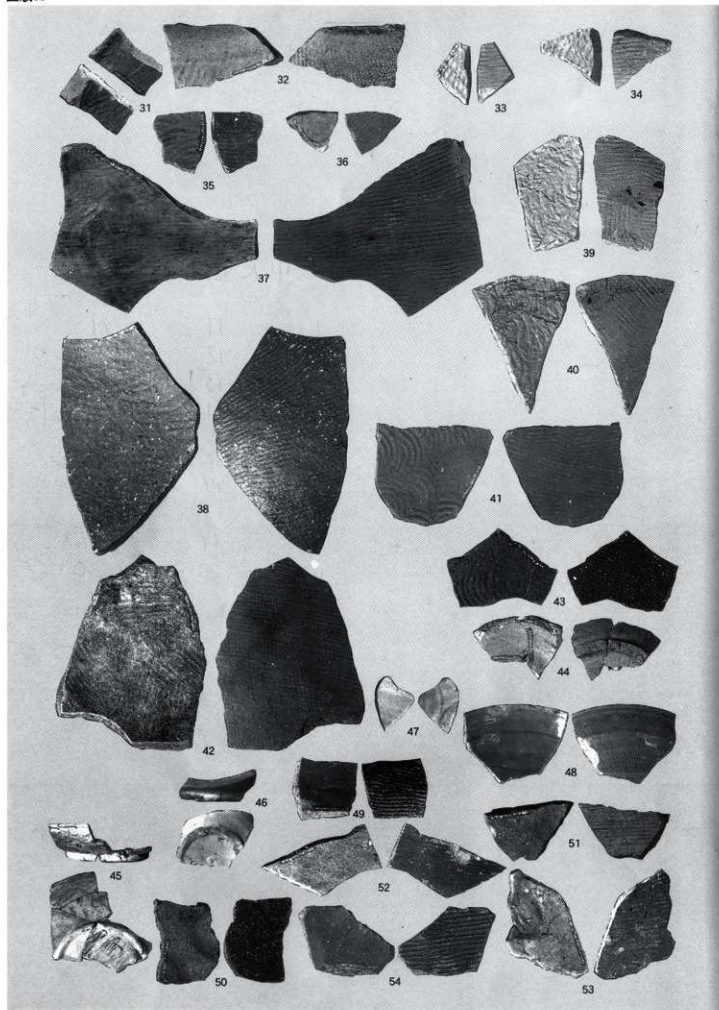
34トレンチ遺物出土状況



34トレンチ土層断面 北から



中沢遺跡出土遺物



中沢遺跡出土遺物



石川遺跡遠景 西から



石川遺跡近景 北から



調査風景



調査風景



2トレンチ土層断面 東から



5トレンチ上層断面 北から



7トレンチ土層断面 東から



10トレンチ上層断面 東から

報告書抄録

ふりがな	かもしかいいせきかくじんちようさほうこうしよ 巻名 丸湯・新道・馬越・上條館・中沢・石川遺跡							
書名	平成9年度加茂市内遺跡確認調査報告書 丸湯・新道・馬越・上條館・中沢・石川遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(8)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会							
所在地	〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 ☎(0256)-52-0080							
発行年月日	西暦 1998年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸湯遺跡	加茂市大字加茂字 五反田2730-1 他	15209	125	37度 39分 55秒	139度 2分 12秒	19970414~ 19970418	56	国道403号線 道路改良工事
新道遺跡	加茂市大字矢立新 田字新道57 他	15029	162	37度 39分 46秒	139度 2分 9秒	19970414~ 19970418	184	国道403号線 道路改良工事
馬越遺跡	加茂市大字下条字 中谷地甲1631 他	15029	117	37度 39分 6秒	139度 1分 36秒	19970422~ 19970425	210	国道403号線 道路改良工事
上條館遺跡	加茂市大字上条字 皆川1410-1 他	15029	139	37度 39分 35秒	139度 4分 34秒	19971104	30	林道改良工事
中沢遺跡	加茂市大字下条字 字中沢乙352-1 他	15029	119	37度 39分 13秒	139度 2分 32秒	19971217~ 19971225	340	民間開発 (工場建設)
石川遺跡	加茂市石川2丁目 2288番地 他	15029	14	37度 39分 55秒	139度 3分 6秒	19980324~ 19980325	100	民間開発 (宅地造成)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丸湯遺跡	包蔵地	古墳時代		古式土師器				
新道遺跡	包蔵地	古墳時代	ピット	古式土師器				
馬越遺跡	包蔵地	平安時代	溝	土師器、須恵器				
上條館遺跡	包蔵地	中世		なし				
中沢遺跡	包蔵地	弥生・平安	土坑	弥生土器、土師器、須恵器		市内初の弥生遺跡		
石川遺跡	包蔵地	古墳・古代		なし				

発行日 平成10年9月30日

加茂市文化財調査報告(8)

平成9年度 加茂市内遺跡確認調査報告書

丸湯遺跡・新道遺跡・馬越遺跡・上條館跡・中沢遺跡・石川遺跡

発行者 加茂市教育委員会
新潟県加茂市幸町2丁目3番5号
☎(0256)-52-0080

印刷所 有限会社 いとう印刷
新潟県加茂市寿町17-6
☎(0256)-52-6660